

## ○形態・生理の兩者の總合統一による分類と種の定義 (藤田 安二\*) Yasuji

FUJITA\*: Classification by the combination of morphology and physiology and the definition of species.

從來の分類はすべて形態を主として組立てられ、生理的差異は全くと言つていゝ位おろそかにされて來た。しかし生體は形態と生理との總合體であるから、形態のみに立脚してものを決めるのは質の半面のみを見る不完全さである。この爲にこそ分類は常に不完全な部分を残し、種の定義も亦著しく困難となる。これは全く生理的差異を分類に加入させない爲めに起るのである。

今迄も形態的に差異なく、生理的に大きな差異を有するものを生理的種 (Physiological Species) として區別する事はあつた。然しこれは從來の種とは全く別で、寧ろその rank としては品種的取扱を受けたに過ぎない。

著者はこれに反し、確然たる生理的種は確然たる形態的種と全く同等の完全なる種である事を主張する。即ち生理的種に形態的種と全く同等の分類學的意義を主張するのである。この主張は當然であると考える。著者はこの形態と生理との二要素をあくまで等価値として對立せしめ、この兩者を總合統一する所にはじめて眞の分類が生れるものと信ずるのである。

かくしてこの分類の全く異なる二要素を組合はす事によつて種を分つ場合を次の如く容易に規定する事が出来る。

### (1) 形態的差異も生理的差異も甚しい場合。

我々はその間に明かなる種の差異を認めて憚らない。そのみならず、場合によつては種以上の差異の存在を疑つていゝ場合があるものと考える。

### (2) 形態的差異大きく然るに生理的には差異少きか、又全く無き場合。

我々は形態的差異に従つて種を分つに何等の疑問を有しない。これは全く從來の立場と同一である。

### (3) 然るに形態的に差異少きか或は全く無き様に考へられるに拘らず、生理的に甚しい差異を有する場合がある。

かゝる場合には形態のみによる分類は不能となる。この際こそ我々は生理的差異を加せしめて、種の差異を合理的に主張し、形態分類の缺點を補正しなくてはならない。

即ち我々は生理的な大きな差異に對して形態的な大きな差異と全く同様な分類學的價值を主張するのであつて、この主張は自然分類の意義に於て甚だ至當であると考えるのである。

### (4) さて我々は形態的にも生理的にも全く差異の無い場合には完全に同一種である事

\* 通産省大阪工業試験所精油研究室 The Laboratory of Essential Oil, Osaka Engineering Experimental Station.

を知っているけれども、**形態的差異無きに拘らず、生理的に小差異を有する場合、及び生理的に差異無きに拘らず、形態的に小差異を有する場合に遭遇する。**この場合にはその間には種的差異はないものと考えてるのであつて、この場合こそこの兩者に**品種**なる概念を興えるのである。

(5) 然るに**形態的にも生理的にも小差異を有する場合がある。**この場合が**變種**であると著者は規定する。

形態のみによる分類に於ては種と變種とを區別する事は極めて困難であつて、Darwin の如き「何れを種とし、何れを變種として見るべきかを決定するには個人的意見以外には何等の有力な標準もない」と言つてはいるけれども、以上の如く生理的要素の導入によつて合理的に種を分ち、變種を規定する事が出来るのである。

更にこの形態と生理との兩觀點に立ち、兩者の總合により種を定義すれば、種の定義も容易であつて、例へば「種とは形態的又は生理的に見て他の群よりも一層類似した個體群の總稱である」と言う様に述べ得る事となり、「變種とは或種に附屬するか或は同様の位置を保つもので、其種に比し、形態的並に生理的に小變化を有する個體群を言ひ」、「品種とは同様に或種に附屬し形態的又は生理的の何れか一方に於てのみ小變化を有する個體群である」と言う様に言へるのである。<sup>1)</sup>

生理的差異、特に成分による分類の利點はそのものがよく撰擇された場合には種はそのまゝその含有する特殊成分によつて規定し得、種の進化はその化學成分の量的及び質的變化として跡づける事が出来る事にある。即ち種の系統はそのものの化學成分の量的及び質的變化の様相によつて確實にされる<sup>2)</sup>。

進化は形態と生理との兩者の對立と統一、その相互作用によつて起るものであつて、形態的變化は生理的變化を引き起し、生理的變化はまた形態的變化を引き起す原因となるものである。

この考えは昭和 23 年 4 月 4 日日本植物學會京都大會に於てはじめて發表されたものであるが<sup>3)</sup>、昭和 11 年には既に出來上つていた。著者のイヌカウジノ屬植物精油に關する研究其他<sup>4)</sup>はすべてこれに従つて行はれたものである。

なお地衣成分の分類學的意義に就ては朝比奈泰彦先生の貴重なる研究が本誌にも多量に發表されている。参照御批判を得たいと思う次第である。(25. 1. 11)

1) この定義は一例として谷津氏(動物學雜誌 20 (明治 41), 364)のそれを参照したが、著者は形態と生理との兩者を加味すれば如何なる從來の定義もすべて容易にその正確度を増大し得るものと考えている。

2) 藤田: 科學 19 (昭和 24), 477 参照

3) 藤田: 植物學雜誌 61 (昭和 23), 90 参照

4) 日本化學會誌 参照の事。